

花巻の先人 名須川他山について

小 原 茂

はじめに

名須川他山（本名・良平、1830～1900、以下「他山」で表記を統一）は、江戸末期から明治33年に東京で病没するまで、儒学者・教育者・政治家として多方面に活躍している。他山の業績については、佐藤昭孝氏による「郷土の教育創立期に貢献した人々(4)名須川他山」⁽¹⁾によって詳しく紹介されている。また他山が撰文を担当した「鶴陰碑」が当館常設展示室に展示されており、花巻市博物館では先人の紹介とともに建立に関する簡単な説明を行なうに留まっている。昨年度、「花巻の文人」と題するテーマ展で近代の文人の一人として他山ゆかりの資料を展示したところである。今回、他山の業績の中でも、衆議院選挙に関係した資料を取り上げ、政敵と見られていた佐藤昌蔵（1833～1922）との関連に触れつつ、他山の政治家としての足跡をたどることとする。

1 他山の略歴

他山は天保元（1830）年12月18日に花巻城下で良平（1798～1838）・サタ（1801～1893）夫妻の次男として生まれた。幼名は千八といい、嘉永2（1849）年閏4月に良平（襲名）に改称し、明治以降は良平と名乗っている。字は伯富で、他山は雅号である。妻の久米子（1833～1914）は太田代恒徳（1835～1891）の姉である。天保年間に吹張町の和田塾で、ついで弘化年間（1845～1848）には東條一堂（1778～1857）に私淑して漢学を修学した。26歳から花巻郷学の学生をつとめ、松川滋安が創立した揆奮場でも学頭、次いで教授に昇格した。明治時代に入り、上京して神奈川県に招かれ横浜港の開港の歴史編さんのかたわら、神奈川県師範学校でも教鞭をとった。

他山は、明治10(1877)年に花巻に戻り、儒学者として花巻に私塾を開いた。他山塾に学んだ門下から、花巻川口町町長を務めた松川他次郎（1862～1942）、花城尋常高等小学校校長を務めた小原忠次郎（号・東籬、1852～1904）、『南部史要』の編者菊池悟朗（1934年没）など、多士済々の人材を輩出している。門下生

たちは他山塾同窓会を結成し、毎年夏に同窓会を開催している。次いで明治20(1887)年に創立された稗貫郡高等小学校（同25年に6か町村組合立に変更）の校長を明治20年から27（1894）年まで7年間務めている。

他山は石碑の撰文を執筆したほか、新聞雑誌に漢詩を度々寄稿し、儒学者としての名声は岩手県内に広く知れ渡っていた。

2 衆議院議員への立候補

(1) 花巻における衆議院議員選挙

衆議院は、明治22(1889)年に公布された大日本帝国憲法の下で貴族院とともに開設された議会である。衆議院議員選挙の有権者は直接国税（地租と所得税）15円以上を納める満25歳以上の男子で、被選挙権者（立候補資格者）は満30歳以上の男子と、「衆議院議員選挙法」で定められていた。稗貫郡は和賀郡や下閉伊郡とともに岩手県第三区に属していた。他山は明治27(1894)年9月に行われた第4回総選挙に初めて立候補し、自由党岩手支部の推薦を受けた弁護士伊東圭介（1857～1895）の前に敗退した。

ここで他山が立候補する以前、第1回から第3回までの総選挙を振り返ってみる。選挙の結果は次の通りである（数値は得点数、いずれも新聞掲載記事による）

- 第1回 明治23(1890)年7月1日
当選佐藤昌蔵（大成会所属）937、次点上田農夫290、佐藤新蔵246
- 第2回 明治25(1892)年2月15日
当選佐藤昌蔵（中央交渉部所属）803
次点宮杜孝一（弁護士で自由党党员）536
- 第3回 明治27(1894)年3月1日
当選佐藤昌蔵696、次点伊東圭介686

花巻出身で岩手県内の郡長を歴任した佐藤昌蔵が連続3期議員に当選しているが、その都度得票数が漸減している。特に第3回は次点と僅か10点の僅差であった。この僅差が生じたのは、明治26(1893)年12月、政府が進める不平等条約の改正で対外強硬を唱えていた

国民協会（中央交渉部の後身）を、佐藤が突如脱会し、有権者から変節と見られたことが遠因とされる。この脱会以後、他山はそれまで応援していた佐藤と意見が合わず、対外強硬派に転じたとされる。なお、佐藤の後援団体として恭敬社が組織され⁽²⁾、大関時五郎（1854～1908）や伊藤金次郎（1850～96）、柏葉富次郎（1914年没）、佐藤庄五郎（1852～1927）、伊藤儀兵衛（1848～1923）らが佐藤の選挙運動を支えた。大関時五郎は恭敬社を脱会するものの、一貫して佐藤の有力な運動員で、明治31年7月の岩手県内の自由党と進歩党の合同会議では自由党側の幹事を務めている。

(2) 他山の立候補と選挙運動

他山は、明治27(1894)年9月に行われた第4回総選挙に初めて立候補した。この年は日清の間で朝鮮半島をめぐる8月に戦争がぼつ発した年である。この時の選挙は当初、佐藤昌蔵と伊東圭介の一騎打ちと見られていた。

佐藤は7月初めに国民協会脱退の理由書を選挙区のひとつ大迫町の有権者に配布したのち、22日花巻に戻り本格的な運動を開始した。運動の成果として選挙終盤の8月には、花巻と黒沢尻の有力者、合わせて48名が佐藤の推薦者として名を連ね、この時点では佐藤優勢と見られていた。佐藤の推薦者は次の通り。
[里川口町] 梅津喜八、橋本喜助、澤田藤兵衛、宮澤善治、宮澤右八、及川源蔵、島和右衛門、佐藤庄兵衛、堀田庄太郎、柴田善治、高瀬彌八、佐藤深松、佐藤金太郎、三田新八、佐藤善助、島伊助、高橋文太郎

[花巻町] 瀬川彌右衛門、伊藤徳次郎、前川圓助、松田善治、松田忠太郎、平野重次郎、佐藤喜兵衛、瀬川徳次郎（以上、「岩手公報」8月15日掲載）

[黒沢尻町] 芳野庄八、米谷久左衛門、郡司萬七、齋藤直吉、齋藤文次郎、齋藤庄次郎、齋藤西松、小笠原文太郎、木村源助、柴田鶴蔵、

[十二箇村] 及川菊次郎、及川節郎、小原多蔵、赤坂長次郎、菊池文次郎、菊池武市、及川與兵衛

[小山田村] 下坂全次郎、菊池宇之助

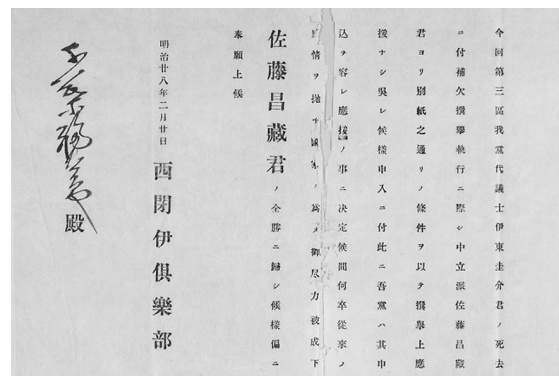
[中内村] 阿部忠志、小田島金治

[谷内村] 小原治五兵衛

（以上「岩手公報」8月26日掲載）

また下閉伊郡遠野町には里川口町長の柏葉富次郎と四日町の伊藤儀兵衛（貴族院議員）が出張し、折からの日清戦争勃発のため軍事公債募集勧誘を名目に区民を集め佐藤への投票を呼びかけている（「岩手公報」明治27年8月28日付）。

伊東圭介は自由党岩手支部の推薦を受け、8月10日黒沢尻町で小宴を開き18名が出席している程度で、目立った活動は新聞に報じられていない⁽³⁾。下の図版は下閉伊郡の有志者が有権者に送った推薦状で、島山巍や菅沼仙太郎ら計26名が名を連ねている。



1 伊東圭介推薦状（奥井勇氏寄贈）

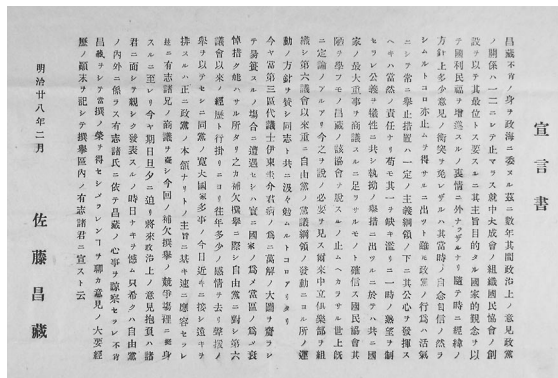
こうした2人の選挙運動に対し、初めて選挙に立候補した他山の動きを次に見てみる。7月21日に花巻町で集会があり、他山の推薦を決議し本人が承諾している。8月半ば石鳥谷町内で第三区硬派懇親会が開かれ、関善太郎ら70名が出席し他山推薦が協議されている。17日の新堀村での集会には盛岡から内堀頼吉が来訪し、他山推薦を運動した。その結果新堀村では鈴木久右エ門ら約10名が他山側に傾いている。黒沢尻町では高橋嘉太郎と小野崎耕夫の2人が運動を進めた。下閉伊郡鱒沢村や遠野町では国民協会所属の高橋忠太郎らが発起人となり14日懇親会が開催され、小山田村から伊藤昌厚が出席している⁽⁴⁾。

この時の選挙結果は、伊東圭介556、名須川良平490、佐藤昌蔵396であった。新聞の推薦広告から佐藤昌蔵優勢で、佐藤の当選が予想されていた。開票結果と伊東圭介の当選は佐藤昌蔵支援者には予想外であった。しかも初めて立候補した他山に約100票をつけられている。他山は初めての選挙で伊東圭介に敗れはしたものの、得票で佐藤を上まわったことは善戦したといえる。

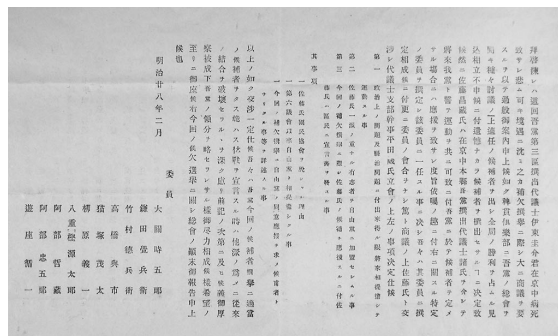
(3) 2回目の立候補

次に明治28(1895)年3月の補欠選挙を取り上げる。この補欠選挙は伊東圭介が当選して任期半ばの明治28年2月6日に急死したことから、3月3日に開票された。選挙期間は1カ月に満たず、選挙は佐藤昌蔵、宮杜孝一、他山の3人による三つ巴と見られていた。

佐藤は立候補するに当り、自由党の大関時五郎らと協議し、国民協会脱退の理由や政治方針を記した宣言書(図版2)を公表し、同党岩手支部から推薦を受けることに成功している。また佐藤と第三区の自由党党员との間で行なわれた協議内容が報告書(図版3)の形で同時に作成されている。報告書には、自由党が候補者をたてず佐藤を推薦する代わりに、佐藤とその支援者が自由党入りすることが明記されている。



2 佐藤昌蔵宣言書 明治27年2月



3 総会顛末報告書 明治28年2月

これに対し、他山は立候補を躊躇したものの、高橋嘉太郎や小野崎耕夫らから「一を以て二に当る、敗れるも辱しとせざれば奮って運動すべし」と説得されて立候補を決意した。開票結果は、佐藤昌蔵737票、名須川良平639票であった。他山は健闘して前回の得票数より140票上回ったものの、またも敗戦した。他山は敗戦の弁として「何時までも競争す

る」という決心を語ったという⁽⁵⁾。なお、他山は明治31(1898)年1月、創立間もない花巻銀行の監査役となり、梅津喜八や瀬川弥右衛門ら選挙では佐藤を推薦した花巻の実業家たちに交じって銀行経営に参画している。

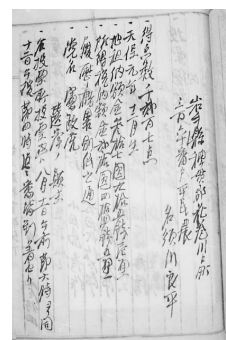
(4) 他山の当選

他山が衆議院議員に初当選したのが、明治31(1898)年3月に行なわれた第5回総選挙の時である。2月に選挙の日程が公表されると、他山は前回の失敗の恥辱を注ぐとして、立候補を決意する。家族たちは選挙の運動費が足りないとして反対して、一時断念したものの、進歩党などから出馬を催促されて改めて立候補を表明している。佐藤昌蔵は前回同様自由党岩手支部の推薦を受けた。この選挙もまた佐藤との一騎打ちとなった。

開票の結果は、名須川良平789、佐藤昌蔵683であった。他山は佐藤に100点の得点差をつけ、三度目の立候補で初当選し、宿願を成就させた。同年8月の第6回選挙では、結成間もない憲政党の推薦を受けて再選された。

他山の初当選に至る経過について、岩手県公文書から改めてたどる。明治31年に2度実施された総選挙は、「衆議院議員選挙関係明治三十一年」と標題のある簿冊に、投票結果のほか、本人の履歴や納税額が記載されている。

まず第5回の総選挙の記録から、取り上げる。

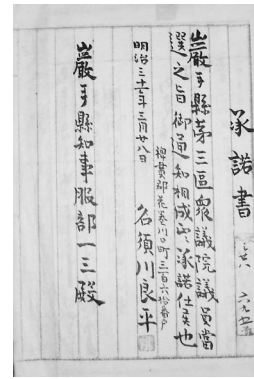


4 第5回総選挙 名須川良平の履歴

(第五回衆議院議員結果 明治三十一年三月実施)

- 岩手県稗貫郡花巻川口町
- 三百六十番戸 平民 農 名須川良平
- 一 得点数 七百八拾九点
- 一 天保元年十二月生
- 一 地租納額金拾七円九拾五錢壹厘

- 一 所得税納額金拾八円八拾四銭
- 一 履歴ノ概略別紙之通
- 一 党名所属不明
選挙ノ顛末
- 一 各投票所投票函ハ三月十六日午前第六時ヨリ同十七日午後第八時迄ニ悉皆到着セリ
- 一 三月十八日午前第八時三十分選挙開会、午後第四時十分閉会ス
- 一 選挙委員ヲ七名トシ、其氏名左ノ如シ
和賀郡中内村 佐々木慶太郎
同 岩崎村 佐藤源太郎
稗貫郡好地村 高橋重次郎
和賀郡藤根村 小原甚太郎
上閉伊郡土洩村 阿部與右エ門
和賀郡谷内村 蟹沢久平
稗貫郡新堀村 折居俊蔵
- 一 投票総数千四百八拾参票
無効投票 六票
- 一 被選人氏名得票数左ノ如シ
 - 一 七百八拾九点 名須川良平
 - 一 六百八拾参点 佐藤昌蔵
 - 一 壹点 名須良平
 - 一 壹点 宮杜孝一
 - 一 壹点 名須川良
 - 一 壹点 須川良平
 - 一 壹点 名須川要平



5 承諾書

履歴書で「花巻書院」とあるのは揆奮場を指す。他山は神奈川県在職中には外交日誌の編纂のほかに、邏卒（巡査）700名に漢学を教授している。明治10年の地誌編纂とは「岩手県管轄地誌」編纂のことである。他山は任命された当日に辞職し、県への出仕を自ら絶っている。他山の履歴は、佐藤昌蔵が岩手県に出仕して郡長を歴任したのと好対照である。なお、履歴に「党名所属不明」とあるが、当選後の4月には推薦を受けた進歩党に入党している。

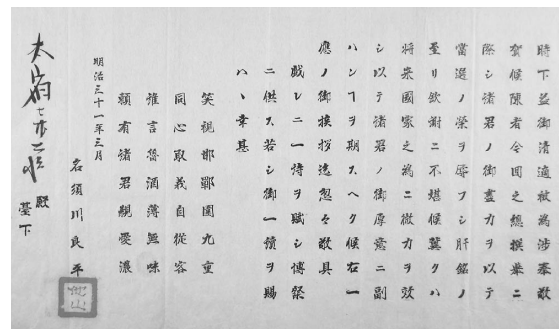
初当選を果たした他山は、支援者の一人本宿喜蔵に感謝の書簡（図版6）を送っている。

履歴書

- 稗貫郡花巻川口町大字里川口 名須川良平
- 一 安政四年盛岡藩花巻書院学生ニ挙ラル
- 一 万延元年同上学頭ニ到ル
- 一 慶応三年同 旧士卒兵団御編制ノ際隊正ニ任セラル
- 一 明治元年盛岡藩学修文館寮長ニ任セラル
- 一 同二年藩朝議員ヲ帯務、大属ニ準ス
- 一 同五年神奈川県外交日誌編纂ヲ命ラレ、且邏卒七百名漢学教授帯勤ノ命アリ、午後一時ヨリ警保課出仕
- 一 同七年横浜尋常師範学校余課教員ヲ兼ス
- 一 同十年依願解職
- 一 本県地誌編集ヲ命シラル、即日辞職
- 一 同二十年稗貫郡高等小学校長ニ任セラル、同二十五年依願辞職

承諾書

岩手県第三区衆議院議員当選之旨御通知相成、正ニ承諾仕候也
稗貫郡花巻川口町三百六拾番戸
名須川良平 ㊤
岩手県知事服部一三殿



6 感謝状（吉田義昭氏寄贈）

読み下し文は次の通り。

時下益々御清適^{わた}させられ、恭賀^{きょうが}奉り候、陳^{のぶ}れば今回の総撰挙に際し諸君の御尽力を以て、当選の榮^{かたじけの}を辱^{かたじけの}ふし、肝銘^{きんしやう}の至り欽謝^{きんしゃ}に堪えず候、冀^きくは将来国家の為に微力を効し以て諸君の御厚意に副はんことを期すべく候、右一応の御挨拶迄、忽々敬具

戯^{はく}れに一詩を賦^{はく}し博^{はく}祭^{さい}に供す、若し御一読を賜^{たま}はば幸甚
笑^{わら}って邯鄲^{かこ}の園^うい九重^{ここのへ}たるを視る
同心義^{どうしんぎ}を取り自ら従容^{じゆんじやう}たり
誰^{たれ}か謂^いう、魯酒^{ろしゆ}薄^{うす}く味の無^なきを

頼み有るはただ諸君の親愛の濃きのみ

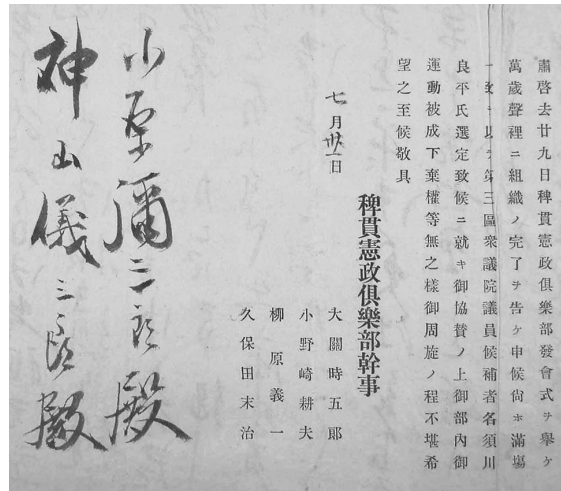
漢詩に詠まれた「邯鄲の圍」と「魯酒」は中国の故事を引用したものである。魯から献上された酒が薄く無礼だとして、楚が魯を攻撃した。その隙に魏が趙の都邯鄲を包囲した。ここから「魯酒薄くして邯鄲囲まれる」の故事が生まれている。伊東圭介や佐藤昌蔵らと当選を争った選挙を「邯鄲の圍」に見立て、それを打ち破ったのは有権者から寄せられた濃い親愛による、と感謝している。

次に明治31年8月に行われた第6回の総選挙を取り上げる。中央の政界では、第三次伊藤内閣の地租増税案に反対した自由党と進歩党が合同して憲政党を結成し、同党は第一大隈内閣（明治31年6月30日～10月31日）の与党となった。岩手県内でも中央の動きに呼応して憲政党岩手支部が結成された。当時の新聞記事から、支部結成の経過をたどってみる。

7月16日、盛岡で旧自由党の集会が開かれ、佐藤昌蔵が座長となって自由党・進歩党合同と政党内閣組織が報告され、憲政党支部設置のため交渉委員に大関時五郎ら6名が選ばれた。進歩党との交渉が直ちに着手され、24日には岩手支部の発会式が開かれた。発会式と同時に、規約が承認され、盛岡に支部を、各郡市町村に倶楽部や通信部を設置された。支部の会長に下田栄光が、支部運営に当る評議員に旧自由党側から大関時五郎、旧進歩党側から小野崎耕夫ら29名がそれぞれ選ばれた⁽⁶⁾。

第三区稗貫郡では、29日花巻で倶楽部の発会式が開かれ、他山を立候補者に推薦することが決定された⁽⁷⁾。右の資料がそれである。

選挙情勢を報じた「中原角逐録」には、佐藤昌蔵と他山の間で、第6回の選挙は他山を推し、次の解散のときは佐藤を推す、などいう密約があったと報じられ、大関らが新聞社に申し入れてこの密約を否定している⁽⁸⁾。



7 稗貫憲政俱樂部挨拶状（吉田義昭氏寄贈）

第三区の選挙結果は、名須川良平1207点、佐藤昌蔵80点で、他山の圧勝であった。この選挙を記録した県の公文書は次の通りである。なお、受領書に記載された「当選の証」は図版8として次頁に掲示した。

（第六回衆議院議員結果 明治三十一年八月実施）

岩手県稗貫郡花巻川口町

三百六十番戸 平民 農

- 一 得点数 千貳百七点 名須川良平
- 一 天保元年十二月生
- 一 地租納額金參拾七円九拾五錢壹厘
- 一 所得税納額金貳拾円四拾四錢五厘
- 一 履歴ノ概略別紙之通
- 一 党名 憲政党
- 一 選挙ノ顛末
- 一 各投票所投票函ハ八月十一日午前第六時ヨリ同十二日午後第四時迄ニ悉皆到着セリ
- 一 八月十三日午前第八時選挙開会シ、零時四十五分閉会ス
- 一 選挙委員ヲ七名トシ、其氏名左ノ如シ
和賀郡立花村 小田島彦作
上閉伊郡宮守村 太田代作太郎
和賀郡二子村 高橋嘉太郎
同 郡黒沢尻町 齊藤忠兵衛
稗貫郡矢沢村 佐藤敬育
同 郡新堀村 折居俊蔵
同 郡花巻川口町 金子弥助
- 一 投票総数千參百八票
内 有効投票千參百七票
無効投票 壹票
- 一 被選人氏名得点数左ノ如シ
一 千貳百七点 名須川良平

- 一 八十点 佐藤昌蔵
- 一 十七点 一ノ倉貫一
- 一 壺点 高橋嘉太郎
- 一 壺点 菅沼仙太郎
- 一 壺点 萬長次郎

右之通

受領書

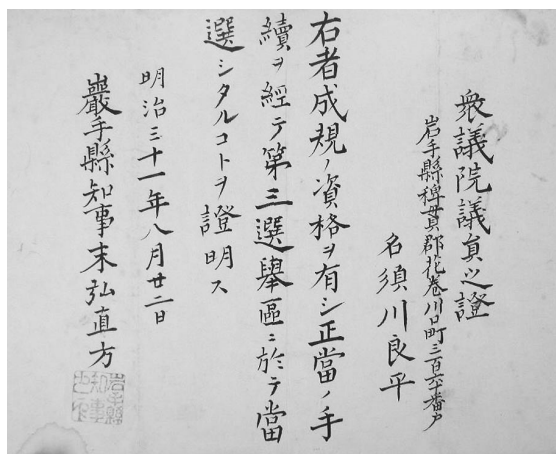
第三選挙区ニ於て衆議院議員当選之証書御送附ニ相成、正ニ領収仕候也

明治三十一年八月廿四日

稗貫郡花巻川口町三百六拾番

名須川良平 印

岩手県知事末広直方殿



8 衆議院議員の証 (名須川昭子氏寄贈)

(5) 他山死去と補欠選挙

他山は衆議院開院を受けて上京中、1月末に病気にかかって危篤の状態になった。急遽2月2日次男の富澤純蔵と女婿小野崎耕夫が上京したが、翌3日病死した。遺骸には良が付き添い4日花巻に戻った。葬儀は8日名須川家菩提寺の宗青寺で行なわれ、千人余りが集まったと報じられている。3月6日と同7日付の「岩手毎日新聞」に、岡山直機(もと花巻町助役、1858年生れ)が寄稿した「他山名巢川先生を悼む」と題する詩文がある。長文であるが、ここに試みに読み下し文にして紹介する。

明治庚子、二月三日他山名須川先生の訃に接す、哀悼止むこと能わず、今夕灯下に感懐を叙し以て哀しみを同志に分かつ、

他山名須川先生、東奥花陽の老儒也、経史の園に逍遥し、文章之圃に彷徨し、口絶えず百家之編を諷じ、手は止まずして六芸の巻を繙く、高所に勇退して久しく閑地に在り閑達を求めず、名声を期せず、斯道自任し以て材

を育てるを自ら楽しむ、固より一世之儒宗為り、遠近に其の名を伝え、而して其の門に集う者蓋し幾千人、其の子弟に待つ也、循々として倦厭之色無し、晷々として懈怠之氣無し、其の口講指画を経承し成人となる者勝げて数えべからず、夫れ東奥地勢偏陲に在りと雖も由来未だ嘗て有為の人士無しとせず、戊辰之变故に遭遇、民心沮喪す、時に渴し後に湿す、歳寒、遅れて暖かくす、口言わんと欲して嘯嘯(口をもぐもぐさせること)し、足進まんと欲して趑趄す、百事萎縮して振るわざるは故無きに非ざる也、嘗て花陽之人士閭里(郷里のこと)之衰頹を慨し、相謀りて曰く、地方不振、百事將に国人之後に上らんとするは、彼の人也、而して彼則ち之を能くす、我則ち然らず、然らざる所以は材に乏しき也、凡そ殖産興業之本、人材を育てるに有り、人材を育てる道、学を興すに在り、学舎を起し材を陶てるにしかざる也、乃ち一舎を創設し、名を大有社と謂う、蓋し周易の大有之卦より取る也、時に明治十一年某月也、良師に乏しきを憂え、先生に会す、東都より帰る、是より先、先生旧盛岡藩学作人館修文所教官為り、維新後、属廢館に及ぶ、先生所見あり、東都に遊ぶこと有年、是に至り花陽之有志其の至(到着のこと)を聞き、大喜し馳せ往きて省み(訪問し)、時令の外を問う、違ならずして一言を陳べ先ず師に請わんとす、先生直ちに其の拳を嘉として諾す、精励刻苦、祁寒を憚らず、大暑を厭わず、教養甚だ勉む、先生嘗て冠胃たらんと刻して曰く、大塊我に仮すに文章を以てす、亦見るに足るに斯道を以て自任する也、積年累月、其の門を出て或いは進んで官を守り職に就く者有り、或いは退きて起業を謀り産を興さんとする者有り、或いは名を政界に有るもの、或いは身を教育に委ねる者有り、其の立身濟家を得んとする者は、抑誰之恩たるや、亦將誰れ之賜たるや、恩の大なり、賜之重き、皆奮期して報効せざるはなし、明治三十年衆議院議員を選挙するに当り、有権先生をして岩手県第三区議員候補者とす、先生固辞す、再び請う、輒ち応ぜず、確答すること約数日、期に及び止む無く諾意を表す、権者大喜す、是の時に当り一方之区民、自由派某氏に薦めて反抗者に試さんとす、花陽之人士、奮激突起、櫛風沐雨、西に駆け、東に逐う、党旗林立し、両々対峙す、犄角して勇を争う、甲の地に敗れ、乙の処に勝ち、南に得、北に失す、競争すること旬余日、邯

鄂之圍い一解す、蓋し区又敵無く克く点を得て全勝する者、党员之力以て致すと雖も、然し又安くんぞ恩荷の賜に負うに非ざるを知るか、協力同心、以て報効を図るに由らん哉、嗚呼、先生自ら求めること無しと雖も、人求める、自ら期さずと雖も、人推す、宜しき哉、名聞益々彰か、聲誉愈揚ぐる也、今夫れ顕要之路に趨り營利之途に迷う、朝所謂新田氏之臣為るも、夕足利氏之門を候う、数々仕進し、俗務に汲々たり、一旦志を得るや、権を憑み勢いに依り、意気昂然、己に勝つ者は則ち之を忌み、己に倅る者則ち之に昵づく、旧名声を貪り、上位を想す、雷霆の如く下僚を侮ること、土芥の如し、偏浅に局量し、起居鮮腆、博愛物に宕ざるを知らず、礼節人に侍るを知らざる也、其の身己の人に嗤笑する所たるを知らず、人を笑わんと欲し、身之分を忘る、権を恣にし勢を張らんと欲する者、先生之風を一聞すれば、則ち將に自ら有する所柳損たるを慙観せんや（以下省略）

前半では他山の経歴を述べながら、「凡そ殖産興業之本、人材を育てるに有り、人材を育てる道、学を興すに在り、学舎を起し材を陶てるにしかざる也」と人材育成の必要性を説いている。また明治30年の衆議院議員立候補と当選を述べているが、正しくは明治31年3月の選挙で、自由党の某とは佐藤昌蔵のことと見られる。同年7月の自由党と進歩党が合同して憲政党が結成されたことについて一切触れられていない。

明治33年2月、他山が衆議院議員の現職で病死したため、補欠選挙が行なわれた。佐藤昌蔵と一ノ倉貫一が立候補し、26日の投票の結果、803点を獲得した佐藤昌蔵が当選した。一ノ倉が優勢に立っていたが、佐藤が壮士を呼んで有権者に強迫してした結果、形勢が逆転したと言われている。選挙運動の最中湯本村で急死した菊池勇三郎のため義捐金募集の広告が出されている。他山の急死を悼み、厳粛な選挙となるべきところ、残念な出来事であった。

3 他山の人となり

他山の人となりについては、没後に建立された「名須川他山翁碑」に触れられている。菩提寺の宗青寺発行『天巖山宗青寺』に読み下し文が紹介されている。今回宗青寺の了解を得て、読み下し文を掲載する。

名須川他山翁碑

楽しみ、英材を教育し以て国家の用に供すを楽しむより莫く、悲しみ画策して未だ齋志成らずして没するを悲しむより莫し、他山翁の如きは之を兼ねる者と謂うべし、翁良平と称し、幼名千八、名須川其の氏、他山其の号也、南部藩ノ世臣にして花巻邑に住す、邑藩の支城也、考の名互、妣和田氏、翁夙に学を好み、東條一堂に私淑し博聞強記にして詩文



9 他山翁顕彰碑（宗青寺境内）

を善くす、又武田氏の兵法を究む、邑校の学頭たり、明治二年盛岡藩学寮長に擢んで大属を兼ねる、五年神奈川県官に遷り開港史を編み、師範学校を兼ねる、十年罷り歸りて帷を下して、徒に授くるに諄々と訓誨するも倦む色無し、遠近より争い来り門弟一千余人に及ぶ、業成り立身国家之用に供する者多し、曾て海内を歴遊し広く碩学名士に交わり風俗人情を観察し、世道を憂えて曰く、汚れ下るに趨れりと、慨然として匡濟之志有り、三十一年衆議院議員となりて大いに規画すること有り、而るに中道にして東京の旅寓に病没す、

実に三十三年二月三日也、生を距てること天保庚寅十二月十八日、享年七十又一、帰りに郷里宗青寺の先塋之次に葬る、配太田代氏、四男一女を生む、長貞蔵歿、次純蔵出でて富澤氏を嗣ぐ、次隆蔵新潟始審裁判所判事補と為るも先に歿す、次良家を承ぐ、良夙に帝国文科大学の業を卒え現神奈川中学校教諭たり、女小野崎耕夫に適く、翁の人となり忠誠温恭にして一郷之望を負い謙虚に人を容れ長を揚げ短を護う、未だ嘗て口舌を以て人を上げることなし、是を以て人皆悦服す、少くして父を喪い母に事えるに至孝、愉色にして承飲すること数十年一日の如し、天資羸弱にして病を善くす、平生撰養怠らず、飲を嗜むと雖も昼間盃を手にはせず、夜僅かに微酔し就寝す、終身変らず、其の他能く其の寿を保つ故を類推すべし、郷人嘆惜して来会者凡そ二千余人、既にして門人醜金し碑を邑公園に建て、以て之を不朽とし亦其の遺徳の人の深きに入るを觀るに足れり、頃日良状を携え来り銘を余に請う、乃ち其の梗概係りを叙す、銘じて曰す、

慨然たる憂国 將に為す所あり 中道齋志
あゝ悲しむべし 学殖富贍 造るは此れ人
材濟々多士 邦家之基 其の功不滅たり
銘豊碑に在り

東宮侍講正四位勲二等文学博士
三島毅篆額

明治三十三年七月

女子高等師範学校教授従五位勲五等
南摩綱紀撰
松田秀雄書
虎戸東吉刻

碑文の文中、「考の名互」とあるのは間違いで、互（字義住、雅号・可休、1777～1857）は父・良平の兄である。長男の貞蔵（1851～68）は禎蔵とも表記し、三男で明治以降司法畑を歩んだ隆蔵（1860～84）とともに、「鶴陰碑」には儒学後進として顕彰されている。この碑は他山没後10年に当る明治43（1910）年5月17日に、東公園（旧新興製作所工場跡地）内に建立除幕された。

4 結語

他山の足跡について、今回衆議院議員への立候補を中心に記述した。他山が教育畑から政界に身を転じた理由が、佐藤昌蔵の国民協会脱退にいかたと伝えられる以外、いまひとつ不明なところがある。また他山の選挙に

関する資料は、初当選後の挨拶状や「当選の証」など数点しか確認されていない。これに対して政敵の佐藤昌蔵には、今回紹介した「宣言書」に見られるように、当選のためには手段を選ばずという側面が見られる。他山の選挙を支援した人々はまず他山の人望を頼み、自由党や佐藤昌蔵の恭敬社のような政党や政治結社を組織しなかった。他山は明治31年8月の再選で、初めて憲政党という政府与党の正式立候補者として、有利な運動を展開した。第三区の有権者は1400人ほどで、現在の選挙に比較すれば市町村議会議員の選挙に近いものである。政党という組織による選挙活動が有利であることはいまも昔とかわることがない。今後、他山の選挙に関する資料が確認されることを期待するものである。

新聞の閲覧では岩手県立図書館や盛岡市上田公民館図書室のマイクロ・フィルムを利用した。花巻新渡戸記念館からは、佐藤昌蔵関連資料の提供をうけた。「他山翁顕彰碑」の読み下し文掲載については、宗青寺の了承を得た。改めて感謝申し上げる。

註

- (1)『花巻史談』第11号、花巻史談会、1986年刊
- (2)「吾が県に於ける政治的運動の沿革 花巻町（恭敬社）」（『岩手公報』明治24年1月20日付）、「佐藤昌蔵先生」（岩手公論大正4年12月～同5年4月、花巻新渡戸記念館提供）
- (3)第三区候補者「岩手公報」明治27年8月19日付
- (4)第三区逐鹿場裡光景「岩手公報」明治27年8月28日付
- (5)花巻通信、豪気未錯「岩手公報」明治28年3月19日付
- (6)憲政党岩手支部発会式「岩手日報」明治31年7月26日付
- (7)和賀碑貫憲政倶楽部「岩手日報」明治31年8月2日付
- (8)中原角逐録「岩手日報」明治31年7月31日付